『それぞれのプロジェクトX』

ひじり在宅クリニック　院長　岡本 拓也

さか江さん（97歳）は、糖尿病や認知症がある寝たきり全介助の患者さんです。同居の長女が、さか江さんの血糖を毎食前に測定してその数値に合わせてインスリンを打ち、下の世話や食事を食べさせる介護などすべての世話をしています。今年の3月には左の踵に褥瘡が見つかりましたが、切開してみると既にかなり深く広く壊死しており、深さは骨にまで達していました。元々そんなに栄養状態も良いわけではないので、正直、完治させるのは無理と思いました。重度の糖尿病もあり感染したら命に関わるので、せめて感染は防ぎたいと思いましたが、長女の医療者顔負けのケアにより、驚くべきことに半年で完治しました。長女は、母親のケア自体を楽しんでいるようにも見えますし、時には母親をひとり残して家庭菜園をしたり山菜やキノコを採りに山に入ったりもしており、実に人生の達人です。

トモさん（99歳）は、長女夫婦の家で暮らしていますが、間質性肺炎の治療で維持量のステロイドを内服していることもあり、しばしばせん妄が出現します。いったんせん妄の状態になると2日間位は過活動の状態になります。色々な薬も試しましたが、スッキリと効くわけではなく反って転倒や誤嚥のリスクも高まるため、結局、長女夫婦が腹をくくるという解決策？に落ち着きました。嵐のせん妄期間は、せん妄を和らげるための薬を使うのはなく、夫婦が交代で力を合わせて乗り切る、と。間もなく関わり始めて1年半になりますが、この夫妻はせん妄の母親を介護する大変さも含めそれを笑いに変えて楽しんでいる節もあり、これまた人生の達人です。

郁子さん（79歳）は、娘の強い思いで在宅復帰を果たし、既に2年以上が経過しました。退院前カンファランスで娘曰く…母は家族が命の人でした。私たち家族のために本当に尽くしてくれた人。入院しているとコロナのせいで会ってもあげられないので家に連れ帰ってあげたい。仕事を辞めて介護とも思ったけど当面は介護休暇を使って世話をします…と。脳梗塞後遺症で寝たきり全介助、栄養や薬は胃瘻からですが、ST（嚥下などが専門のリハビリ職）にも介入してもらった結果、少しは口からの食事を楽しめるようになりました。現在、娘は仕事に完全復帰し忙しく働きながら、父親と力を合わせ母親の介護を続けています。郁子さんは韓国の俳優イ・ビョンホンが大好きで、郁子さんを元気づけ笑顔にするためにイ・ビョンホンのドラマや映画は非常に重宝する必須アイテムとなっています。

フミ子さん（101歳）は、長女と同居しており、訪問し始めて1年半位になります。蜂窩織炎（皮膚の感染症）の治療を終えて退院することになりましたが、歳も歳ですし、入院中にすっかり衰えて寝たきりになりましたので、訪問診療で診ていくことになりました。初回訪問から間もなく、明らかに脳卒中と思われる症状を認めました。どうするか長女と相談しましたが、100歳という年齢と全身状態を考え、このまま家で看取る方針となりました。その間、軽い点滴だけをしていましたが、その後、フミ子さんは見事に復活を果たし、口からも食べるようになり、デイサービスにまで行くようになりました。どれだけ沢山の患者さんを診てきても、人の寿命はわからないものだと痛感します。レスパイト入院（介護者に休養してもらうための被介護者の入院）などを時々入れながら、長女は無理をしない介護を今も続けておられます。まもなくカルチャーセンターで催される小椋佳のコンサートチケットも取れたようで、今は期待に胸を膨らませています。

真央ちゃん（29歳）は、先天性の病気のために、小さい頃から両親によって全身全霊を尽くした慈しみ深く手厚い世話によって大切に守られ育てられてきた女性です。訪問診療を開始して早くも4年以上になります。寝たきり全介助で在宅酸素も使用しています。栄養や水分は胃瘻から摂取し、筋肉を柔らかくするための特殊な注射を全身の色んな箇所に打つため年に何回かは札幌の病院にまで行かなければなりません。両親によると「30歳まで生きられることを目標にしてきた」とのこと。来年の3月には、愛くるしい笑顔で笑う真央ちゃんの30歳のお誕生日を、両親を労う意味でも盛大にお祝いしたいものです。

介護と介護者の生活のバランスを大事にしながら、皆そろってハッピーでいたいものですね。